

間接互惠性が印象に及ぼす影響

氏名：加藤 千尋

指導教員：竹澤 正哲

これまで、「恩送り型互惠性」という現象の存在を示す実験研究が行われてきた(Bartlett & DeSteno,2006; Watanabe et al,2014)。一方で、「評判型互惠性」と異なり恩送り型互惠性の互惠規範が人々に見られないといった実験結果や(加村、2013)、恩送り型互惠性は理論的に進化しにくいことが数理モデルやコンピュータ・シミュレーションで示されてきた(Boyd & Richerson,1989;Nowak & Roch,2007; Pfeiffer et al, 2005)。確かに恩送り型互惠性は存在するものの、それは Barelett & DeSteno (2006) & Watanabe et al. (2014) が示唆するように感情が深く関わるものであるため、特定の感情がうまく発現する時にのみ恩送り型互惠性が観察され、頑健ではない可能性がある。そのため、本研究では、恩送り型互惠性は現象の発現自体は稀であるが、恩送り型互惠性の記憶率が高いため人々の間で注目される現象であるという仮説を立て、恩送り型互惠性の記憶率について検討した。参加者が観察した行動を互惠行動と非互惠行動へと分類し、二種類の行動パターンによって記憶率に差がみられるか調べた結果、恩送り型互惠性条件において互惠行動の方が非互惠行動よりも記憶率が高かった。つまり、恩送りをする場合と、八つ当たりをする場合に記憶率が高かった。実際に人々は恩送り型の場面ではランダムに協力を行っているといった実験結果(Watanabe et al.,2014)を考慮するならば、恩送り型においては非常に協力行動が連なることは稀であるといえる。こうした稀である現象であるため、記憶に残りやすかったと考えられる。また、社会交換に関わる協力・非協力行為の方が、単なる社会行為よりも記憶された。これは人々が無意識のうちに、行為の種類によって注意や記憶に関する判断を戦略的に変えていたという解釈も可能である。